

## 編集後記

大学は学費値上げで、また紛争が起こつてゐるが、本館は毎日平均三千名を下らずに学生によつて熱っぽく賑つてゐる。百年記念事業の一つに、新図書館建設の計画があるときが、ぜひ実現したい。本年度も予定どおり、第十二号、第十三号と二冊「紀要」を刊行し、やつとその遅れをとり戻し得たことを感謝します。荻野前館長、平田現館長の御尽力によつて、古文書室が七号館三階に開設され、今年はその整理に重点が置かれてきたが、社会科学研究所から三文書の移管を受け、古文書センターとしての新しい役割へむかつてすすんでゐる。

戦後、和漢書の冊子目録は休刊されていたが、その復刊の手始めとして「法律篇」が近く発刊される。図書目録の作成こそ、図書館のなすべき基本的業務であり、従来の分類目録だけでなく、種々の主題目録を、館員の手で作成することこそ、今後の司書のゆくべき道であると思うゆゑ、その方面でも館員と共に努力したい。今いへば必要としてゐることは、部局司書（各学部出向司書）増員の件と、書庫増設の問題である。やつと四十七年度に二、三名が増員されることとなつたが、今後も引き続き毎年増員の要請は続けられねばならぬだろう。書庫増設の方、図書館の地下倉庫にコンパクト・

スタック（移動書庫二十七坪）がつくられたが、焼石に水で、ぜひ恒久的な全学的計画の下で、一日も早く保存図書館をつくらねばならない。

寄贈図書となる「柳田泉文庫」（仮称）が、寄贈以前の手続きとして、稲垣、榎本両先生の所で七号館の整理室で受入準備中のところ、学生騒動のため一時他へ保管することにした。

戦後、毎年入学試験期には、図書館はその試験本部として使用されてきたが、本年より図書館本来の姿に戻り、閲覧業務を入試中も行なうことになつたことは、学生諸君のために喜ばしいことである。（内山事務長）

今年もまた、沈丁花の香りが、どこからともなく漂ってくる季節になつた。そして図書館の南側に並ぶ早咲きの桜も、すでにちらほら綻び始めてゐる。教職員入口の前のもくれんの木が、大きな白い花を飾るのも、もうすぐであらう。

春といえば、図書館にとつて、ひとつ例年とは異なる出来事があつた。それは、学生の要望と図書館の要請とを容れて、大学当局が、第一閲覧室の入学試験本部への転用をやめたことである。

さて、図書館のなかにも、このように長い間のしきたりの故に、私たち館員が、当然のこととして疑わぬような事柄が、少なからずあるのではないか。もちろん、しきたりはすべて変えるべきで

あるなどというつもりはない（それは、しきたりなるが故に、すべてを維持しなければならぬとする意見の裏返しである）。大切なことは、続けるべきものと、改めるべきものとの区別を明らかにすることであり、そのために、しきたり成立の事情や理由を検討することである。資料の整理ひとつをみても、検討に値する問題は少なくない。たとえば、和漢書と洋書という区別のしかた。またパンフレットをはじめとして、地図、写真、錦絵などの一枚物や、軸物、卷子本などを図書といふしよにしていること。あるいはまた整理手続の流れの順序など。私たちは、図書館の外壁にそつて八方にのびていく葛のように、経験の制約をのり越え、視野をひろくして、そこからまた自分の足もとをみなおすよう心がけたいものである。（高宮整理課長）

戦後、新しい大学制度導入に即して大学図書館の活用が重要とされ、そのために、図書館施設の拡充と、司書の確保が急務とされてきた。施設の拡充に関しては、各大学とも図書館の新・増築をこころみ、しだいにサービスの改善向上に務めてゐる。本学でも昭和三十年に図書館の南側に延約四八〇坪の増築を行ない、さらに一昨年は七号館の一部を学習図書室とするなど、その拡充を行なつてきた。しかし全般的にみると、本学の拡充はまず学部で力点がおかれ、図書館はあ

と回しとなってきた感が深い。

一方、司書の確保については、多くの大学で壁につき当たつてゐる。一体、大学における司書職はどうあるべきなのか。その業務は、研究・教育の上でいかなる意味をもつものなのか。教員や事務職員との関係はどうか。司書の採用基準・養成・処遇はどうあるべきか。等、いずれも多く未確定要素を含んだまま放置されている。そして、これらを確定させる要素は次の三点であろう。一つは教員・研究者が、新しい教育計画・研究体制についていかに図書館を有機的に活用し、図書館機能の有効利用に努めるかどうか、第二は経営当局が、図書館の新しい使命について深い認識をもち、強力な図書行政を打ち出し得るかどうか、第三は図書館員が習慣的な図書館業務を超越し、高度な図書館サービスを發揮し得る知識・能力をたくわえ得るかどうか、である。ことに、司書職制度確立の基盤となるものは、司書の努力と奉仕による社会的評価の確定ではなからうか。

(川上管理課長)

本年は、去る一月に、大隈重信侯の五〇年祭が挙行され、また、この秋には創立九〇周年を迎えるという意義深い年である。

日本の近代化に大きな役割を果たしてきた本学の歴史は、創業以来の老侯および諸先輩の高遠な理想の下にそがれた

計り知れない学園への愛情と、建学の精神への不断の反省と、そして長い伝統に基づく発展への逞しい意欲と、これら三点によつて支えられてきたものである。また、今日、百万冊余の蔵書を有し、大学図書館としての役割を果たしつつある本図書館も、同じくこれらの諸先輩の学問への熱情や図書館への協力によつて培われ、さらにはまた館員の努力によつて盛り上げられてきたものである。

しかし、新制度下における大学図書館の責務はますます重く、高度なサービスが強く要求される。館も可能な面についてはいろいろの実現もさせ改善への努力をつづけているのであるが、書庫の狭隘さをはじめとして、現図書館の建物構造上の問題や、司書職員の不足などのために十分対処できぬことは、いまや近い将来に向かつてさえも一抹の不安を感じざるをえない。

近年、新図書館が建設され、または、計画中である大学も増加し、その設計についても経験上からの創意工夫が施されて、大学の誠意と努力のよく窺われるものも少なくない。

図書館や図書館情報サービスを無視した大学像は今日ありえない。大学当局の積極的な対策と、創業百年の記念事業としての新図書館の建設を切に要望したい。

(寺本閲覧課長)

▽館庭浅春―。もくれんの苔の灰白いふ

くらみ。緋寒桜のそのの可憐なさし紅。年々歳々花相同じといえぬ都会の昨今、年ごとに珍重の度は深まるばかり……。▽その花にそえてか、花をそえてか13号となりました。執筆諸家のご苦労に謝しつつ、江湖大方のご清覧を祈ります。

▽巻頭の緒方先生の玉稿により、館蔵ヒボクラテス像の資料的価値が再確認された杉本先生によつては、一見眇たる館蔵の一メモに、価値ある洋学資料としての新しい紹介の光があてられた。

▽「医王の眼は鑽石を宝と見る」の類で館蔵百万冊のうちから、これからも新しい何かが見出されてくるにちがいない。▽柴辻氏は前号に続いて館蔵古文書の翻刻解説を、石山氏は明治27年の本学蔵書目録を多くの人の忘失の前に呈出され、柴田氏は日頃の切実な感想を、吉田氏は特異なジャンルの文獻を熊切氏とともに解題紹介された。一枚のカード記述に止まりえないものが眼前を流れる。庫内の典籍は無言に待つ。今回は、柴田氏等、窪田氏、金子氏、目黒氏六館員の四篇を次号に割愛した。(茂木主査)

早稲田大学図書館紀要 第十三号

昭和四十七年三月二十日 発行

編集兼

内 山 義 實

印刷所

早稲田大学印刷所

発行所

早稲田大学図書館